

一人一人に応じた効果的な指導や支援の在り方

～主体的に学ぶ意欲を伸長する指導・支援～

熊本県熊本市立五霊中学校 教諭 宮野 佑允

I 実践に当たって

私は、現在、情緒・LDの通級指導教室の担当をしている。本校には、情緒が不安定な生徒や様々な困難さをもった生徒が通っている。本校の通級指導教室では、三つのことに重点を置き、指導に当たっている。一つ目は、自尊感情を高める指導である。昨年度、本校の通級指導教室に通う生徒に対して、アンケート調査を行った。「学習等において達成感を感じますか？」という質問に対して、約8割の生徒が「NO」と答えた。生徒の自尊感情を高める第一歩は、学校における達成感を高めることにあると考え、達成感を感じる学習指導の展開に重点を置き指導に当たっている。二つ目は、生徒・保護者のニーズに基づいた教育課程の編成である。日常の何気ない生徒や保護者とのコミュニケーションを大切にし、そこから支援のヒントを得るようにしている。三つ目は、主体的に学習を進めることができるための支援である。本校の通級指導教室に通う生徒の多くは、週1回～3回程度しか特別な場での指導を受けておらず、学校生活の大半は、通常学級で生活を送っている。特別支援学級のように日常の多くで支援を受けるわけではない。また、家庭学習において、自分一人で学習を進めることができない生徒の割合が多い。アンケートの結果では、「家庭において、学習を自分一人で進めることができますか？」の質問に対して、約7割の生徒が「NO」と答えた。学校生活や学習等において、「生活の自立」や「学びの自立」ができる支援がとても重要であると考えている。また、そのことが将来の社会生活での自立につながってくるものと思っている。

今回の実践では、上記の重点項目のうち、三つ目の「主体的に学習を進めることができるための支援」を中心に述べることにした。

II 実践内容

I 生徒が主体的に学べるための指導・支援

(1) コミュニケーションについての指導

① 生徒の実態と思い

・対象の生徒は現在、中学校3年生の男子である。コミュニケーション（自分の気持ちや意見を整理して伝える）が苦手であるが、ICTの活用が得意な生徒である。生徒は、自分の長所・短所を自分なりに分かっていて、コミュニケーションスキルを身に付けていきたいという思いをもっている。

② 実践のきっかけ

・通級指導教室において、対象生徒と日常生活についての会話を楽しんでいた。その会話の中で、生徒が、「先生、来月、国語の授業で好きな本についての発表があるのですが、どうしたらいいですかね。」と私に伝えてくれた。その会話がきっかけとなり、この実践を行った。対象生徒は、本が大好きで、内容もしっかりと理解していた。相手に伝えることだけ支援すれば発表できると思った。また、会話の中で、教師が生徒の思いを感じ取り、それを成功体験につなげることで、自立へつながればよいと思った。

③支援の実際（本の紹介に向けて）

- ・対象生徒が、国語の授業でスムーズに発表することを目標に指導計画を立てた。以下が指導計画である。

単元の指導計画		
次	時間	主たる活動内容
1	2	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの基礎に関する指導 ・ゲームを通じたコミュニケーション活動 ・キーボード入力練習
2	2	<ul style="list-style-type: none"> ・紹介する本を選ぶ ・キーボード入力練習
3	2	<ul style="list-style-type: none"> ・本の紹介文作成と発表練習

熊本市の中学校では、令和2年度から生徒一人一台、タブレットが配布されており、そのタブレットを活用して本の発表を行うことにした。この単元の導入時には、キーボード入力練習の時間を設けた。スムーズなキーボード操作を可能にするために、キーボー島アドベンチャーというサイトを利用して練習を行った。実際の紹介文作成では、NHK for schoolのお伝と伝じろうの動画を見ながら、メタモジを使い、紹介文を作成した。メタモジを利用した理由は、メタモジの付箋紙を使い短い文章で分けてかけることや、発表時にアイテムを使って支援ができるからである。右の写真1は、実際に生徒が作成した紹介文である。この紹介文は1時間で作成したが、キーボード入力練習の成果もあり、スムーズに作成することができた。その後、タブレットのカメラ機能を使い、発表の練習を行った。動画を見直し、何度も練習することで本番に向けて自信をつけることができた。写真2は、発表練習の様子である。

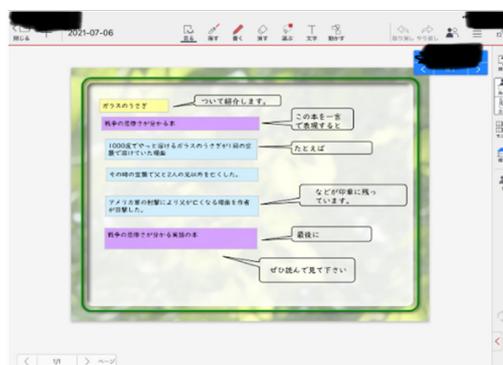
国語の授業での発表は、教科担当も驚くほどスムーズな発表を行うことができた。生徒は発表後、「意外と簡単な用意で発表ができますね」と言っていた。今回の実践では、生徒の思いを大切にしていくことで生徒の主体的な学びを見ることができた。今後、このような成功体験が活かされることを願っている。

(2) 通級指導教室における教科支援

①主体的な学び

- ・本校の通級指導教室に通ってくるLDのある生徒の実態として、自分一人で学習を進めることができない傾向が1つ挙げられる。勉強ができるようになりたいとやる気はあるが、どこから手をつけてよいか分からないなど様々な要因がある。上記でも述べたように、通級指導教室での支援は週に数回であり、その他の授業や宿題などは自分一人で進めていく必要がある。本校

(写真1)



(写真2)

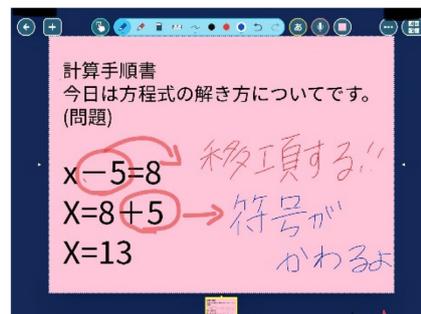


の通級指導教室では、支援がなくても自分一人で学習を進めていけるように支援を行っている。

②支援の実際（ICTの活用を通して）

- ・英単語の発音が分からずに、英語が嫌いになっている生徒が多い。英単語の発音を自分一人で学ぶことができるようにタブレットのアプリ活用を勧めている。例えば「みんなの英単語帳」というアプリがある。このようなアプリを使うと、家庭で学習する時、自分一人で発音を調べることができる。写真3は、計算が苦手な生徒にロイロノートで「計算の手順書」を送っている画像である。計算の仕方に困った生徒は、この手順書を見ながら学習ができるように支援している。手順書の支援については生徒からの要望に応えたものであった。簡単な支援で生徒がスムーズに学習に参加できている。

(写真3)



Ⅲ 成果と今後の課題

コミュニケーション指導についての取組では、生徒のニーズや思いを大切にすることで主体的な学びにつなげたり、ICTを活用することで、生徒はスムーズなコミュニケーション活動に参加したりすることができた。そして、その後の学校生活において、ICTを自分から活用して学習に参加する場面を見ることができた。また、日頃の生徒の様子や生徒との何気ない会話に生徒が主体的に取り組むためのヒントが隠れていることや、1つの授業の目標を生徒が自分の力で達成できるような教師側の環境づくりが大切であることがわかった。生徒が成功体験を繰り返すことで、学習への意欲が増すことをこの実践で感じることができた。

教科支援の取組では、生徒が家庭学習等における困難さを減らすことができた。支援を継続していく中で、宿題などの家庭学習を自分一人で進めることができるようになった生徒もいた。生徒の自立した学びに向けて、生徒の実態に応じた支援の在り方や支援の量を少しずつ変化させることが重要であることが分かった。すべてを支援するのではなく、できることを最大限に活用しながら、できないことをカバーすることで主体的な学びにつながったと感じた。

今後、主体的な学びをどのように自立や主体的な社会参加へつなげていくかが課題である。中学校卒業後を見通しながら支援を行っていききたい。